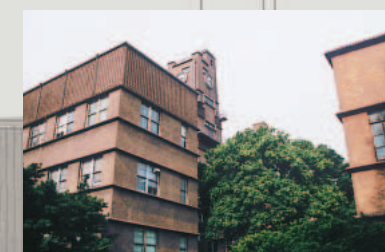
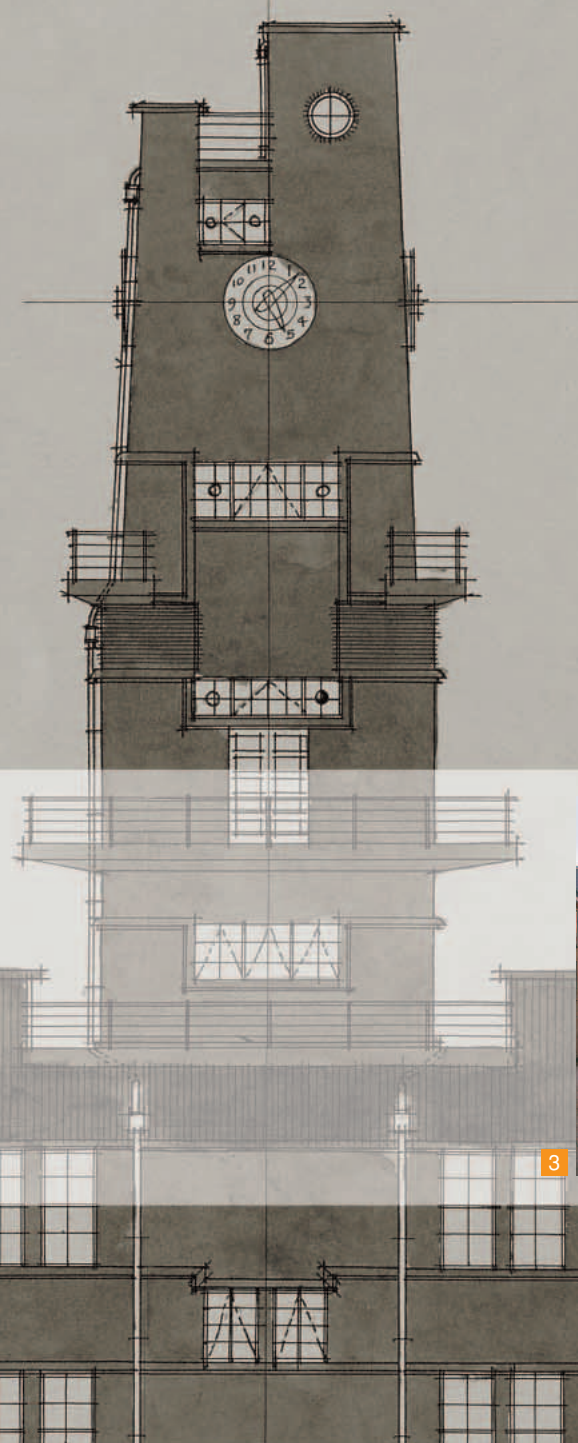


大学の「登録文化財」を見る

岸田 省吾

大学院工学系研究科助教授



最

近、登録文化財制度というのが始まった。築五〇年以上経ち、多くの人に親しまれてきたような建物なら、審査を受け、文化庁に登録できる。東大も早速、いくつかの建物を登録した。今回はその中から紹介されることのない二つの建物を選んでみた。

一つは、駒場Ⅱキャンパスにある旧航空研究所の本館（現先端科学技術研究センター三号館、昭和四年）である。キャンパスの正門を入って真正面の奥に据えられた建物がそれである。周囲の鬱蒼とした緑の中、左右手前に試作工場と風洞棟を従え、時計塔がひととき高く聳える。東大の附置研究所の中で随一の偉容を誇った、と言われることも頷ける。

とりわけ時計台のデザインはユニークである。前面に微妙な膨らみを持ち、幅も頂部に向かってわずかに絞られている。時計まわりの円形や四角の窓、途中にはりついたバルコニーも見る角度によって表情を変え、設計者の遊び心が感じられる。

時計台下の建物本体も斬新なものだ。全体は周囲の建物より暗い色調を帯び、まごころなし引き締まって見える。正面の大きな壁面は軒線下だけ凹凸のある仕上げで、全面に強い抑揚が与えられている。無駄な装飾が少ないことと相まり、単純な形による構成の中に力強い印象が生み出された。

設計は、内田祥三（二代総長、元建築学科教授）の門下生であった岸田日出刀が担当した。内田は当時急ピッチで進められていた本郷キャンパスの震災復興計画で手一杯であったのだろう。当時の最先端分野の研究所を二手に任せられ、岸田はこそとばかり腕をふるい、のびのびとデザインを楽しんだようだ。

航空研の設計が始まった頃、ヨーロッパでは新鮮な感覚の建物がいくつも現れていた。ウィーンのヨーゼフ・オルブリッヒやアムステルダムのカール・デ・クラークといった建築家の作品である。旧航空研の建物を見ると、岸田はかの地の新建築に強い共感を覚えていたに違いないと思う。

余談になるが、東大のメインキャンパスである本郷でも、内田門下生たちによるこうした建物が出現した。附属病院の南研究棟（赤煉瓦棟）や旧夜間診療所（現広報センター）である。内田の代表作である大講堂で

すらその影響が窺える。ここで、本郷にあるもう一つの文化財、工学部列品館（大正二四年）を見てみよう。本郷キャンパスの正門を入りすぐ左手にある薄茶色のこじんまりとした建物である。内田の代表作の一つで、その後のキャンパスの成長にとってもたいへん重要な建物であった。

内田はこの建物で、後に「ウチダゴシック」と呼ばれる独特のスタイルを確立し、震災で壊滅したキャンパスをすばやく、かつ統一感あるキャンパスとして再生できた。

本郷では明治以来の伝統となっていたゴシック的な意匠を地震に強いコンクリート造で継承すると共に、建物の構成も統一した。階数を三階で止め、建物の中心には光庭をとる。エレベーターが不要となり、十分な通風と採光も確保できた。外壁のスクラッチタイル（溝付きタイル）も、色むらや壁の不陸（凹凸）を目立たせない合理的なものであった。

中に入ると、正面に堂々とした階段が鎮座している。これは列品館がもともと種の博物館であったことに関係する。一つの階段だけで、建物の中を三階から二階まで一筆書きで巡って行ける。名称の列品館というのも、学術標本を並べ、公開する、すなわち「列品する」ことに由来している。

この建物で特筆されるのは、法文校舎などとともに正門から大講堂に続くキャンパス中心部の景観を作っていることだ。「文化財」としてはむしろ、建築群の「要素」として環境の形成に役立っていることの意義の方が大きい。

本郷キャンパスは、そもそも日本における近代大学初のキャンパスである。統一的なスタイルの建物と豊かな緑が一体となって形成するキャンパスの環境そのものが、「大学キャンパス」という一九世紀から二〇世紀にかけて生み出された空間形式を、稀に見る密度で蓄積する文化財と言っても大過ない。

大学にとって重要なことは、そうした文化財を所有することや言うより、それを現実に生きているキャンパスとして使い続ける、つまり「文化を行為する」ということではないだろうか。そんなことを考えながら今回の散歩を終えることにする。